V 教育に関する文章

5-1　教育の理想

1968年9月15日、ソウル市YMCA会館における講演

私は、金教臣先生[1]や宋斗用先生[2]と同じ頃、共に内村鑑三先生のもとで聖書を学んだ者であります。その頃、内村先生が青年達の集まりの時に、韓国の青年のほうが、日本の青年よりも信仰がよっぽど立派であると言われたことがあります。それは、韓国の方々が、日本の悪い統治の故に苦しまれ、その苦難の故に鍛錬されたからであります。また、あるキリスト教主義の小さな学校の創立 30 周年を記念して書かれた「回顧三十年」[3]という文章の中でも、内村先生は、「日本の青年の間には愛国心がなくなってしまった。韓国の青年の方がはるかに立派な愛国心をもっている。」といわれております。その愛国心というのは、本当の愛国心であります。自分の国は何でも良く言い、他の国の事は何でも悪く言うというような間違った愛国心ではありません。本当の信仰につながる愛国心であります。だから信仰においても優っていると言われたのであります。私は、いまその事を思い起こしまして、まことに日本の韓国統治は、韓国にとってバビロン捕囚[4]であったと思うのであります。矢内原先生も同じように言っておられました。ユダヤ人はバビロン捕囚により鍛えられました。そしてイザヤ書 53 章に示されているような、現実のキリストと寸分も違わぬキリストの姿を考えることが出来るようになったのであります。自ら苦しんで、自らを犠牲にして人の罪を救うということは、これは人間の思想を超越したことであります。そういう高い、深い信仰をバビロン捕囚の故にもったのであります。ですから、日本の韓国統治も、神様の韓国に対する深い、大きい恩恵であったと信じます。もちろん、それだからといって日本の行為を是認するのではありません。日本はその罪のために、神様から大きな罰を受けております。皆さんの中には、日本は韓国を苦しめる悪いことをしながら、今物質的にも経済的にも栄えていることを不思議に思い、恨みに思っている方があるかも知れません。けれども実は、経済的繁栄ということは神の罰であります。イザヤ書の初めのところにも、神の罰を警告しているところで、ユダが繁栄していることをあげています。イザヤが預言者として立ちましたのはウジヤ王の時であります。内村先生は、ウジヤ王を日本の明治天皇にたとえておられました。ウジヤ王の時に、ユダの国威は非常に上がったのであります。その時に、国威の上がったということの中に、神の罰を認めたのが、預言者イザヤであります。私はここに、もちろん日本の罪のために、皆さんにお詫びをするために参りました。先程からもお話のありましたとおり、堤岩里教会の問題[5]も、韓国統治全体の悪い事の結晶の一つとしてとり上げているのであります。しかし、私共がいくら謝ってみても、あるいは皆さんが気が済むまで日本の私共に怒りをぶちまけて見ても、それではいつまでたっても

韓国は良くなりません。ユダヤ人がバビロン捕囚(ほしゅう)によって信仰が非常に進みましたように、韓国が信仰的に深くなることが最大の祝福の源(みなもと)であります。現に内村先生が感心しておられたように、ある一部の方々はその苦難によって信仰的に非常に進歩されたのであります。それ故(ゆえ)に私は韓国のために、韓国の方々が本当に神様を信ずるようになることを祈ることが、最大のつぐないであると思っております。韓国の方々が、今まで世界のどこも持たなかったような、高い、深いキリスト教の信仰をもたれて、それによってすべての困難にうちかたれますように切(せつ)に祈るものであります。

韓国の最大の不幸は、何といっても南北二つに分かれていることであると思います。それに対して、武力をたくわえて北にうち勝つということをしても、それでは真の統一はできません。一時的にはできても、また形勢が逆になって同じような事を繰り返すにすぎないのであります。それ故(ゆえ)に、キリスト教の信仰をもって、本当の信仰をもって、キリスト教の信仰の最高のあらわれである、敵をも愛する愛をもって、北朝鮮をも愛することが、唯一の道であると思います。北朝鮮の人が皆さんに対して為(な)した色々なひどいことについては私も聞いております。北朝鮮が良いから、それで愛せよというのではありません。敵を愛する愛が最高のキリスト教であります。どうか、そういう愛をもって、今韓国の最大の困難な問題を解決なさるように、皆さんが一生懸命になられることを祈ります。愛によって、どんな敵でも味方に変えることができます。「愛はすべてに勝つ」と昔から言われております。敵をも愛する愛をもっておったが故(ゆえ)に、キリスト教がローマ帝国のあの大きな国家権力にもうち勝ったのであります。そして、この愛より他に、韓国の問題を解決する道はありません。

さらに、韓国の皆さんは、この「敵をも愛する愛」によって現在韓国がおかれている多くの困難にうち勝つことができるだけでなく、またそれによって、全世界に向かって本当に人類が取るべき道を教えることにもなるのであります。世界にいま沢山(たくさん)困った問題が起こっております。偉い政治家、偉い学者が智恵(ちえ)をしぼって一生懸命になって居(お)りますが、どうすることもできないで困っております。これらの問題も、敵をも愛する愛という、最高の愛をもつところのキリスト教の信仰より他に、解決の道はないのであります。韓国の方々が、多くの苦難を通して、本当の信仰を学び、敵をも愛する愛をもつことができるようになりますならば、韓国は今まで世界の国々が、国として行なう事のできなかった大きな事をすることになります。韓国が、キリスト教を最も高い形に仕上げるということになると思います。私は、その事を韓国の方々に申し上げたくて来たのであります。それは非常に難しい事ではあります。けれども、キリストに頼る時には、どんな人にでもできます。どうか、キリストに頼りまして、そして、敵をも愛するような愛をもつ事ができ、キリスト教をこれまでどこにもなかったような、高い、深いものに成長させていただきたいと思うのであります。その事ができれば、人間として、国家として、最高の光栄であります。それができなければ、

どんなに物質的に栄えても、経済的に繁栄しても、無意味であります。

私に、日本の教育と教育の理想という事について申せということであります。日本は、神様を忘れています故に、非常な困難に出会っております。先程も申しましたとおり、経済的には繁栄しておりますけれども、その事自身が、神の大きな刑罰であります。そしてそのことは、繁栄が日本の教育を崩壊寸前に陥らせているという事実の中に、よく表われております。日本の教育は非常に進んでいるように見えております。けれども、最も堕落したものであります。教育不在の教育、人間疎外の教育と言われております。私が日本の小さな地方新聞に昨年書いた事を読んでみます。「日本の教育が今危機に瀕していることは、多くの人が気付いている。ある人は道徳教育が少しもできていない事をもってその証拠にし、ある人は学力の低下をもってそう判断する。そして今日の教育は、教育不在の教育だとか、人間不在の教育だとかと言っている。教育は人間形成だと言われているが、少しも人間形成になっていない。人間が目前の享楽をのみ目的とする動物的な存在となってしまう。本当に日本の社会のために心配になる。」と長くなりますので以下は要約致しますが、この危機は、教育を受ける者も、教育を授ける者も、唯物的になったからであります。教育を受けるのは、立派な人間になるためではなくして、就職に都合のよい条件を得るためというふうになってしまっています。教育も一種の投資と考えられております。それだから、学問をするために教育を受けるのではなくして、試験でいい点を取るために勉強するのであります。受験技術は優れているけれども、学問ができない人が出て来て困っております。英語の試験をすると、点は大変よい点を取ります。けれども英語を書けもしなければ、話せもしないし、読めもしないという大学卒業生が出て困っております。先日ある大学の学長と話をしておりました時に、近頃の大学生は英語はできるけれども国語はできないので困るといっておりました。けれども、これは間違いでありまして、実は英語もできないのであります。英語のできないのは昔からでありまして、いまさらできなくても目立たないのでありますから、英語はできるけれども、といったのであります。けれども以前は国語はどうやら間に合っておりました。読むことも書くこともどうやらできておりました。けれども、今の大学生は、読む事も出来なければ書く事も出来ない、というようになってしまいました。大学生の学力低下の問題は非常に困った問題であります。世間では、知育[6]ばかりで徳育[7]をしないから困った状態が起こるのだと言っております。知育は就職の役に立つから、知育だけ出来れば良いと思っているのでありましょう。けれども実は知育もできていないのであります。昨年日本で一番いい大学の東大と慶大の四年生が就職することに定まった会社の金庫泥棒をしたという事が、日本中に伝わりまして大問題になりました。生物学でも数学でもちゃんと出来る人は、自分がこれから就職するという会社の金庫を盗んだらどうなるかという事くらいはわかるはずであります。東大や慶大の学生でさえ考える力が

ないのであります。大学生がマンガばかり見るという事は、日本の定評になっております。考える力がないのであります。学問とは考える力を養(やしな)って、考えて真理を求めるものであります。けれども、考える力を養(やしな)わないものですから、学問ができない者ができてしまっておるのであります。大学の入学試験の時に、考えておったらその間に時間がたって、問題を全部解くことができず、総得点が少なくなって入れなくなります。いいかげんにやる人がいい点をとって入学できるという状態であります。日本の大学卒業生の学力低下は非常に困った問題となっております。これも、教育という事を唯物(ゆいぶつ)的に考えるからであります。神を離れた繁栄(はんえい)が神の刑罰であり、人間を不幸にするものであることを、日本の教育の実情がよく示しております。

教育というのは、英語でも独逸(ドイツ)語でも、ひき出すという意味であります。人間の内にもっているいいものを引っぱり出してやる、というのが教育であります。人間というのは、全世界とも代え難(がた)いものを内にもっているのであります。これはもちろんイエス様の「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。」と言うところから出ている考えであります。信仰のない日本の最高裁判所の判決例にも、その意味の言葉がのっております。そういう貴(とうと)いものを誰ももっているのでありますが、それをひきだして発展させてやるのが教育であります。それですから人間が魂(たましい)という貴(とうと)いものをもっているという事がわからなければ教育はできません。信仰がなければ本当の教育ができないというのはそこにあります。もちろん信仰がなくとも、人権の尊重とか人間の貴(とうと)さということは、ある程度言われております。けれども唯物(ゆいぶつ)的な考えの行なわれているところでは、利益の問題等のために消されてしまって無力になってしまいます。キリスト教の信仰のないところで立派な教育の行なわれておった例は、少しはもちろんあります。それは信仰がなくとも、その貴さがわかった人によってなされたのであります。けれども、その貴さはすぐに忘れられてしまいます。ですから、あくまで教育の純粋を守るのには、信仰が必要であります。私は信仰がなくなった教会は困るけれども、信仰のなくなった学校はそんなに困らないと、そう思って学校を信仰の母体とすることを始めました。けれども、学校も信仰がなくなったら本当の教育ができないと気がつきました。それでどうして信仰がなくならないように、信仰が形式化しないようにすべきかという事が、私の学校の今の最大の問題であります。しかし、いずれにしましても、信仰がなければ本当の教育が出来ないという事は確かな事であります。この時に当たって、韓国でも信仰をもって教育をなされた方がおられるという事は大きな強味(つよみ)であります。沢山(たくさん)おられると思いますが、私はあまり知りませんが、金教臣(キムキョシン)先生のような方が出られた事は、韓国にとりまして、韓国の教育のために実に大きな事であります。日本の教育は、信仰のない故(ゆえ)に非常な危機に瀕(ひん)しております。どうか韓国におきましても、その事が手本となりまして、信仰のない教育が行なわれないように、皆さんが一生懸命になられる事

を切に望む次第(しだい)であります。また、そのために私たちも心を合わせて祈ることが、韓国に対する日本の罪の大きなつぐないになると思っております。どうか韓国の方々が、キリストに頼りまして、本当に強くなり、本当に賢(かしこ)くなりまして、教育の問題ばかりでなく、目下(もっか)の最大の問題南北二分(にぶん)という不幸、これはまた世界の最大の問題でありますけれども、それにうち勝たれることを切にお祈りする次第(しだい)であります。これが、私共にできる最大のつぐないであると思っております。

5-2　学問・教育・信仰

1969年3月23日、石原聖書集会における講演

イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれるものでなければ、そこにはいることは決してできない」。そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。
（マルコによる福音書 10 章 13 節～ 16 節）

一

この主が幼な子を祝福された時の御言は、信仰の真理は幼な子のような心にならなければわからないものだということを教えているのであるが、単に信仰の真理だけでなくて学問的な真理も幼な子のように謙虚にならなければ求められない。それ故学問をするには幼な子のように謙虚になることが必要である。

今日の日本の最大の問題は大学紛争[8]であるが、この真の原因は大学で教育が行われず、学問が学ばれなくなったことにある。今日は教育も学問も金儲けの為になされている。学校に入るのは学問をして立派な人間になるためでなく、よい就職の条件を得るためであり、また大学の教授も、学問の貴さがわかって学問の研究のために教授になるのでなく、名声を得たいため、出世したいためになる。これも金儲けのためである。それ故金儲けになるような、人気を博する研究をするようになる。学歴偏重の社会は卒業証書さえ持っておればよいと考え、学問ができなくとも、人間が出来てなくとも、東大出身なら出世出来る。だから学問も学ばれず、教育も行われなくなった。国公立大学が真っ先に卒業証書販売株式会社になってしまった。

それで気がついた事がある。日本では卒業式のことを卒業証書授与式といっている。卒業証書を得るために学校へ行くのであるから、学問は学ばなくともよい。受験技術を身につけて試験を通り、卒業させて貰えばよいと考えている。それ故近頃の大学卒業生の学問の出来ないことは驚くばかりである。人間は学校を卒えても勉強しなければならない。卒業式は学校で学んだことを基にして、これから本当に勉強を始める時である。韓国にプルム学園[9]という無教会の信仰に基づく教育をしている学校がある。そのプルム学園では卒業式のことを創業式といい、卒業生のことを修業生といっている。大変よい教育を行っている。

今日、世間では大学が時勢の進歩について行けないでこんな騒動になったといわれ

ているが、これは大きな誤りである。実は時勢にまき込まれて、金儲け主義になってしまったから起こったのである。大学の使命は、他の学校も同じであるが、真理を探求し、真理を教えて、その真理に従って生きることを国民に教えることである。ところがその真理の研究をしないで、世間の機嫌をとるようなことをし、学問をやらず、教育を放棄してしまったので騒動が起こったのである。

唯物思想では駄目だ、金儲け主義では本当に人間は生きて行けないのだ、ということを社会に教えるべきなのに、自分が先に立って唯物的、金儲け主義になってしまった。謙虚に真理を求めないで、世間の喝采を博するようなこと、大衆に受けのよいことを言うようになったり、時の権力者に諂うようになったりする。学問を理解しない学者には学問は出来ない。学問というものは本当に謙虚にならなければ出来ない。幼な子の如くに謙虚になり、真理の前に跪くという心がなければ出来ないものである。客観的真理があると確信して、その真理に向かって進んで行く、真理を掴もうと一生懸命になる。それが学問である。

二

ところが、今日の学問の様子を見ると、学問とは自分の考えを多くの人に納得させる技術であると考えておるようである。それでは真の学問は出来ない。今日偉大であると言われている学問の基はソクラテスが建てたのである。ソクラテス以前はソフィストと言われている人々が学問の世界をリードしておって、真理というものは人間が造るものである、ある事を真理らしく思わせるものが学問であると考えておった。それに対してソクラテスは、そんな傲慢な態度では学問は出来ない。まず自分が愚かな者であることに気がつかなければいけない、と言った。「汝自身を知れ」というのがギリシャの学問の基礎である。真理を愛し、知恵を愛さなければいけないといって、フィロソフィア（Philosophia）の言葉が出来た。

「ソフォクレスは賢い、エウリピデスはなお賢い、しかし万人の中でソクラテスが最も賢い。」というデルフォイの神託に対し、自分は愚かであると知っているソクラテスは、自分より賢い人を見出して神託の誤っておることを実証しようとして、賢人と言われている人々を歴訪した。しかし賢人たちはソクラテスと同じように愚かであるが、ソクラテスは自分が愚かであることを知っているのに、彼らは自分が愚かであることを知らないでいるから、やはりソクラテスが一番賢いことがわかったという話は有名である。

このソクラテスの精神をプラトンが受け継ぎ、なお発展させ、またアリストテレスが受けて発展させたので、今日の学問の基礎が出来たのである。自然科学でもアリストテレス以後ガリレオまで二千年近くの間、アリストテレス以上には出なかったほど偉い学問を打ち建てたのである。ようやく中世の終わりにガリレオがアリストテレス

の学問では足りない所があることを知って、新しい研究を加えることを始め、今日の非常に進んだ自然科学が始まったのである。

アリストテレスの有名な言葉に「プラトンは友である。しかしより大きな友は真理である」というのがある。一口に言えばプラトンよりも真理を愛するということである。この態度が学問をするには一番大切である。プラトンは自分の眼を開いてくれた恩人で、最も敬愛する人であるがこと真理に関してはプラトンの言ったことに対してでも譲らない。プラトンの言と真理とどちらをとるかといえば、真理をとるというのが、アリストテレスの精神である。

ソクラテスは人間というものは愚かな者であるということがわからなければ本当の学問は出来ないと言ったが、愚かだということがわかれば謙虚になり、反省し、誤りを捨てていって真理に到達する事が出来る。誤りを捨てるということが学問をするのに一番大切なことである。自然科学が非常に発達したのは、これをよく実行したからである。それぞれの学問に学会があり、自分の研究を学会で発表して、多くの人の意見を聞き、また検討して貰って誤りを正すことをよくやっている。それ故に不完全な人間の知恵ではあるが、月を回って帰って来ることも出来るようになった。謙虚な心をもって、幼な子のような心をもって真理を求めるから出来るのである。

マルクス主義の学問は本当の学問からは離れたもののようである。マルクス主義者はヘーゲルも馬鹿だ、フォイエルバッハ[10]も駄目だ、ただマルクスの学問だけがよいと言っている。このように傲慢では真理の探究は出来ない。謙虚な心でどんな人の批判でも反対意見でも聞いて自分の考えを練り直さなければ学問は出来ない。いくら頭のよい人でも考え落ちはあるものである。マルクス主義の学問が進歩しないのはそのためである。プラトンよりも真理をという真理に対する情熱がない。私は全学連[11]は封建的だと思う。全学連は、日本共産党はマルクス、レーニン[12]に適っていないから間違っているといって、真理に重きを置かないで人間的権威に重きを置く。丁度殿様の言うことなら何でも正しいと考える封建時代と同じである。

内村先生はキリスト教と真理とどちらをとるかと言えば真理をとる、と言っておられた。真理なるがゆえに信ずるのである。ここに内村先生が純粋な信仰を最後まで守り通した秘訣がある。キリスト教は真理なるが故に、どんな力をもってしても打ち壊すことは出来ない。本当に真理を求めるものは最後にはキリスト教の信仰に到達する。内村先生は 1881 年（明治 14 年）札幌農学校卒業後、開拓使御用掛となって水産の調査をして、鮑の卵を初めて顕微鏡下に発見した時に「歓懐措く能はず、感涙滂沱として下り、直ちに祝津村の西方に聳ゆる赤岩山の嶺に登り淼淼たる日本海に臨み独り万物の造主なる真の神に感謝の祈祷を捧げた。」真理を発見して涙を流す程真理を愛しておった。このような真理に対する純粋なる愛は、真理の源なる真の神を信ずる信仰を持って初めて抱くことが出来る。それでなければ金儲けのためか、学者

的名声を得るためにだけ学問をするようになる。本当の学問が出来ない。謙虚に多くの人の意見を聞いて誤りに陥らないようにすることが出来ない。

三

近代の学問で一番大きな業績といえばキュリー夫妻[13]のラジウムの発見である。キュリー夫妻は学者的名声は求めず、真理を求めるために職工のように働いて、何トンというピッチブレンド[14]の鉱石の中から 10 分の 1 グラムの未知の元素ラジウムを取り出したのである。それが基になって今日の原子力を利用出来るような学問が発達したのである。ピッチブレンドを細かに砕いてある薬品に溶けるものと溶けないものという風に二つに分けて、金箔検電器の開いた金箔の閉じる速さで未知の元素から出る放射線によって空気が電気を伝えるようになる力を測って、その力のない方を捨て、ある方をまた二つに分けるということを繰り返して、遂にその力の強いラジウムとポロニウムという二つの元素を分離したのである。

要らないものを捨てて行くということをよくやったから、何 100 万分の 1 という微量の物質を取り出すことが出来たのである。半分にして行くということは、案外早く微量のものをつきとめることが出来る。以前にラジオで 20 の扉というのが行われた。20 回の質問で大抵の物は当てることが出来る。2、4、8、16、32、64 というように 2 倍、2 倍にして行くと 3 回か 4 回で桁が一つ上がって行く。2 倍にすることを 20 回繰り返すと 6 桁の数になり、2 分することを 20 回繰り返せば 100 万分の 1 の微量を取り出すことが出来る。前人未踏の事であるから多くの困難が伴ったので、キュリー夫妻が 10 分の 1 グラムのラジウムを取り出して、その新元素の原子量を 225 と決定するまでに四年近くの時を要した。このように困難であってもラジウムを発見出来たのは、キュリー夫妻が要らないものを捨てて行くことをよくやったからである。これは誤りを捨てて行くのと同じ事である。

人間の知恵の愚かさを悟って謙虚になって誤りを捨てて行くことが、学問をするには如何に大切かということがわかる。ソクラテスが学問の基を開いたということは当然である。ソクラテスが真の神を知らないでこのように謙虚になれたのは奇跡といってもよい。多神教ではあったが、真の神への信仰に近いものを持っていたのであろう。キュリー夫妻は真理を愛し、謙虚になり、職工のようになって働き、地位や名誉を求めずに学問の研究をしたのである。後になって世界的栄誉を得て、王妃になったシンデレラ姫のようになっても栄誉を私せず、ラジウム精製法の特許をとって巨万の富を得ることも学問の精神に反するからといって放棄した。ほんとうに学問を愛し、学問に生きた夫妻であった。

これに反して日本の学者は名声を欲し、栄誉を願っている。誤りを改めるなどは学者の権威を傷つけるかの如くに考える。東大の紛争は医学部の学生の処分に誤り

があったことが明らかになり益々拡大してきた。東大当局者が真理に権威を置かないで、当局者という人間的なものに権威を置いて無形の暴力を用いていたので、学生の暴力を押さえることが出来なくなったのである。総長告示などをもって問題を解決しようという考えが間違いであるが、昨年 8 月 10 日の総長告示で医学部学生処分を撤回したので夏休みが終われば解決出来ると甘く見ておったのが、休み後却って紛争が激しくなった。真理の前に本当に謙虚になって誤りを捨てるという態度に出ればよいのに、それが出来ない。誤っていたから撤回すると言えばよいのに、疑惑を招いているから撤回するといった。正しいと信ずるなら疑惑を招いている位で撤回してはならない。真理に対する忠実さがない。

紛争の始まりは処分問題よりも、主任教授の人間的権威が強すぎて、主任教授に気に入られる研究しか出来ない不満からである。金儲けのための教育や学問のみ行われておって、真の教育が行われず、ほんとの学問が学ばれないからである。

四

教育という英語は Education 独逸語は Erziehung であるが、共に「引き出す」という意味である。人間は誰でもその中に全世界ともかけがえのないもの、人格とか霊魂というべきものを持っている。それを引き出し、発展させるのが教育である。人間形成とはこのことである。学問を教えることによって教育をする。知育のみして徳育をしないから人間が悪くなって困るとよく人は言うが、ほんとうの学問を教えることが最良の徳育である。人は、学問によって人生は嘘やごまかしではやって行けないものだということを身をもって悟る。ここに学問の価値がある。学問の価値はその応用にあるのではない。学問は人間を真理を愛するようにし、真実にするから貴いのである。道徳教育といっていくら徳目を並べて教えても、道徳が行われるようにはならない。学問が人間を真実にする。それ故に学問を教えて教育するのである。

教育とは人格と人格との接触である。学問を通して人格が触れ合うのである。寺田寅彦[15]という随筆の巧みな物理学者がおった。講義は大変下手であったが、身をもって学問を愛することを教えたので、教育者としても偉い人であった。教育者として必要なものは教育技術ではなく、真理即ち学問を愛すること、人間を愛することである。そして唯物思想や物質欲に負けないで、これらの愛を守り通すことは信仰がなければ大変困難である。教育学としてペスタロッチ[16]やフレーベル[17]の教育が研究されているが、彼らの信仰を抜きにしていくら研究してもその教育はわからない。今日の教育学の誤りは、その実践である今日の教育が破滅状態にあることで明らかである。信仰のない立派な学者も立派な教育者もあったことを私も知っている。けれども世の中が悪くなり、唯物思想が横行し、何でも金儲け主義になると、立派な学者でも教育者でもその風潮に負けて駄目になってしまう。如何なる時にも本当の教育、学

問を守り通すということは信仰がなければ出来ない。

十数年前までは真面目な高校教師は、本来の教育をしなければならないが、また父兄の要望に応じて受験準備もしなければならない、これをどう調和すべきかと悩んでおった。しかし今はこんな悩みをする者はなく、受験準備教育を一生懸命にやって進学率を高め出世することのみ心掛けている。昔は人それぞれ職業があり、その仕事をやって行くために収入を得るのであるが、商人は金を儲けるのが仕事だと不思議がられておったが、今はすべての職業が金儲けのためという不思議な職業になってしまった。教師も学者も金儲けのための職業になった。

人生を金儲けのためにのみ費やしてしまう位愚かなことはない。貴い自分の人生をお金で売ることである。お金がないと幸福になれないからお金を求めるのだというがいくら金銭が得られても、まだ足りないまだ足りないと言ってあくせくしておって、少しも幸福になれないでいる。全く金銭の奴隷である。お金の魔力の虜になっている。真の信仰を迷信として排除して、却って拝金宗という迷信に陥っている。この迷信から解放されなければ、真の教育も学問も出来ない。従って大学紛争も解決出来ない。世の中を善くして行く所の教育と学問が駄目になってしまったので、日本の将来はまことに心配になる。これは神に背き、信仰を拒否した罰である。

基督教独立学園を創立する時に、学校を信仰の母体とすることは試みる価値のあることと信じた。教会が信仰の母体である場合は、教会に信仰がなくなった時には中世の教会のように害が烈しいが、学校ならば信仰がなくなっても害が残らないからよいと考えた。しかし今日の情勢が信仰がなくなると教育も学問もほんとには出来なくなることを示している。どんなことがあっても信仰を失ってはならない。困ることは信仰を持っておると考えておって、形式化して、その実、信仰を失っておることである。そうならないためには、常に謙遜であって真の愛があるかどうかと反省することが必要である。愛という行為によって救われるのではないが、主の十字架によって救われたという信仰は愛という実を結ぶ。愛は仲々行えないものであるが、十字架によって示された主の愛の大きさに励まされて愛を行いたくなり、行おうと一生懸命になる。愛を追い求めておる限りは信仰を失うことはない。純粋なる信仰を保つ秘訣はここにある。

（「聖書の言」403 号、1969 年 5 月号）

5-3　今日の教育・ほんとの教育

学問と教育

教育という言葉の英語やドイツ語等は、いずれも「引き出す」という意味の言葉である。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら何の得になろうか」という主のみ言のとおり、人はだれでも全世界ともかけがえのない尊いものを持っている。これは生命とか、霊とか、人格とか言うべきものである。これを引き出し発展させるのが教育である。

教育が、人格の完成とか人間形成とか言われるのはこの故である。鉄を引き出すものは鉄で出来ている磁石である。人格を引き出すものも人格でなければならない。生命は生命でなければ引き出せない。それ故に教育は人格の接触である。心と心との触れ合いである。

教育は学問を教えることによって行われる。学問を教えることによって人格の接触が生ずるからである。教育の育は引き出すことを意味するが、日本語では教の字をつけて、学問を教えて行うことを表している。

学問を教えることによって、教師と生徒との人格の接触が行われる。なおその上に、過去の偉大なる人格との接触が行われる。技術を教えることによっても教育が行われるが、学問を教えることの方が効果が大きいので、学問を教えてなす教育が多く行われる。

学問とは、よく事実を見て、よく考えて、真理を探究することである。そして実験してそれが真理であることを確かめる。探究された真理を集成したものが学問の大系である。

真理を探究することは、真理に対する深い愛がなければ出来ない。真理を愛して学問をし、学問をすることによって真理を愛する愛がいっそう強くなる。そして学問をすることによって、この世界は嘘やごまかしでやって行けないことを悟るのである。

学問は、人間を真理を愛するようにする。人間を真実にする。聖書に、「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」とあるごとく、人間というものは真理に従わなければ生きて行けないものである。

学問の価値は、それを応用して物質的利益を得ることにあるのではない。真理に従って生きなければならないことを悟らせるところに学問の真の価値がある。

学問の価値がその応用にあるなら、今日のように公害問題のはげしい時代になると、学問などない方がよいということになる。これは学問が悪いのでなく悪く用いるのがいけないのである。

人間を真実にすることは偉いことである。これが人格の完成である。学問をもって

教育を行う根拠である。教育とは真理を愛することを身をもって、あるいは全身全霊をもって教えることである。人格の接触、あるいは心の触れ合いである。教育技術の問題ではない。

私が学生の頃には寺田寅彦先生もご健在であった。ところが寺田先生の講義はさっぱりわからないというので評判であった。困っていると「要するに」とおっしゃったから、これからはわかるかと耳をそばだてて聞き入ると、「要するに」はわかったが、それからさきもやっぱりわからなかったという。これほどではなかったろうが、こんな伝説が生まれるほど講議は下手であった。つまり教育技術はなってなかったのである。

しかし、寺田先生は教育者としてもすばらしい方であった。先生の指導を受けた人から立派な学者がたくさん出た。先生は身をもって物理学を愛すること、真理を愛することを教えられたので、偉い教育が出来たのである。

教育の根本は真理を愛すること

近頃では、大学で研究ばかりして教育をしないから、日本の教育が駄目になったという人がある。しかしこれは誤りで、ほんとの研究をすることが教育になるのである。ほんとに真理を愛して研究するのでなくて、名声を得たいため、金儲けをしたいための研究だから教育にならないのである。

自分の研究が漏れて、他の人に先を越されないようにと、机の引出しに入れて鍵をかけ、助手にも学生にも見せないという教授が多いとのこと、これでは教育にならないのは当然である。

またこんな心掛けではろくな研究は出来ない。大学でほんとの学問が学べず、ほんとの教育が行われないから、大学紛争が起こるのである。今日の大学で偉い研究などはほとんど行われないのはこのためである。

また今日は知育のみをして、徳育をしないから、社会が悪くなったのだと言って、知育が社会の要請であるから、やむを得ず知育のみをやると弁解しているが、知育もほんとに行われていないのである。

数年前に、東大と慶応大の四年生が共謀して慶大生の就職先の会社に忍び込み、盗みをはたらいた。そしてそれが発覚したら、盗んだ金を返せばいいだろうと言ったという。

知育のみして徳育をしないからこうなったと新聞等で騒がれたが、これらの学生は学問も出来ないのである。生物学でも数学でも、よく出来る者は、自分がこれから就職する会社の金を盗んだらどうなるかくらいのことがわからないはすがない。学問をするに一番大切な「考える力」がないのである。

昔、小学校で優等賞を与えていた。それにはたいてい、学力優等、品行方正なるこ

とを賞すると書いてあった。学力優等な者はたいてい品行も方正である。だれでも戦前の小学校時代の友人を思いかえしてみると、必ず思い当たることがあると思う。

今日学力のある者の方が悪いようであるが、これはほんとの学力ではなくて、受験技術の優れていることを学力と思い違いしているからである。学問を教えて、ほんとの知育をして、真理を愛することを身につけさせて、嘘やごまかしを嫌うようにするのが真の道徳教育である。単に徳目を並べて暗記させても道徳教育は出来ない。知育をちゃんとする事が道徳教育になるのである。

したがって教育は真理を社会に示して、社会が真理に従うようにさせなければならない。教育が社会を引っぱらなければならないものであるのに、教育が社会に引っぱられたので、今日の教育が堕落してしまったのである。

真理を愛することを教えないから、ほんとの学問も学ばれず、ほんとの教育が放棄されたので大学卒業生の学力がなくなった。今日の大学卒業生の、学力のない例ならいくらでも上げることが出来るが、何よりも確かな証拠は、卒業生が進んで勉強しようとしないことである。卒業とは勉強を終えることと考えている。

優秀な成績で卒業した者が勉強をやめてしまう。なぜしないかと問えば、指導者がない、文献がないからと言う。アメリカでは卒業式の日を「始めの日」という。これまで習ったことを基にしてほんとの勉強を始める日という意味である。それであるのに、日本の今日の大学卒業生は卒業と同時に勉強をやめてしまう。学力がない証拠である。

どうしてこのように教育が行われなくなったかというと、それは唯物思想のためである。唯物思想は必然的に金儲け主義になる。教育を受ける者も、就職の良い条件を得るために受ける。すなわち金儲けのためである。教育をする方も、その職を通して出世するためすなわち金儲けのためである。

その結果、社会に迎合して受験準備教育に専念し、進学率をあげてよい学校、よい教師と思われるようにしなければならなくなり、ほんとの教育を放棄してしまったのである。今日の教育者が金のために教育を売ったのである。

今日の教育は受験の技術たけだ

問題を限られた時間内に出来るだけ多く解かなければならない。ちゃんと考えて解くと時間がかかるので、受験教育は考えないで答えを書く方法を訓練する。学問の出来る人がちゃんと考えて問題を解くと時間がかかり、全部問題がやれないで合格しない。考えないで、この問題にはこういう答えを書くということを暗記しているものが合格するということになる。

大学は、学問の出来ない人を入学させて出来る人を締め出すという愚かなことをしているのである。社会ではむずかしい競争試験を突破したのだから学力があると考え

るが、その実合格者の方が学力が劣っているのである。

それ故、進学率のよい高等学校ほど悪い高等学校であり、競争率の激しい大学ほど悪い大学である。一流の大学を優秀な成績で卒業したものが科学技術庁[18]に就職し、土砂崩れの実験をするのに土質を調べないで水をぶっかけたので、意外に早く土砂が崩れて新聞記者を 20 人近くも殺したという事件が起こった。

土砂崩れの研究に、何故新聞記者を 30 人も呼ぶ必要があるのか。どういう土質の所へどれだけ水をかけたら崩れるかを調べてはじめて研究といえるのに、土質を調べないでただ水をかけるなどというのは子供の遊びではないか。それでいて自己宣伝をすることは忘れないで新聞記者を 30 人も招待するのである。

これでも一流大学を出たから学力が優れていると言えるのか。これはたまたま愚かな実験をしたから辞職しなければならなくなったのであるが、大部分は社会が学歴だけを問題にして、学力を無視しているので、ボロを出さないですんでいるだけである。

学力のない、能力のない人が重要な地位について、官にあっては悪い行政を行い、民間にあっては悪い経営を行うので、日本の国がこんなに困るようになってしまったのである。これでもなお、むずかしい競争試験を突破した有名大学の卒業生が、学力・能力が優れていると言えるのか、日本国民は真剣に反省しなければならない。

受験勉強は受験地獄と言われるくらい青年を苦しめ、青春を蝕み、不完全[19]な人間を作るばかりでなく、国家を支え社会を守るべき学問と教育とを破壊してしまう恐るべきものなのである。何としても受験準備教育をやめさせなければならない。

教育改善とか教育正常化とかが叫ばれているが、非正常状態の本質を見ないで、ああでもないこうでもないと役に立たないことを考えていても正常化は出来ない。日教組[20]が一日スト[21]をするのも問題があるが、ほんとの教育を放棄して受験教育をするのは毎日ストをしているようなものである。それ故、何をおいても受験教育をやめさせなければいけない。

どんなよい試験方法を考えても裏をかかれて、その試験法に対する受験準備教育が行われる。大学で、短時間に多数の試験をしようとすることが間違いの基である。

人間を見ることはむずかしいもので、完全とは言えないが、一番よいことは三年間生徒と接して来た高等学校に任せることである。愚かな大学が他に任せることを嫌って、出来ないことをやろうとするから、学問の出来る人を締め出して、出来ない人を入れる愚かをくり返しているのである。

私の考えている方式を述べる。募集人員の九割を、過去の入学者数の割合で各高等学校に割り当て、各高等学校をして最も適当な者を割合数だけ推薦させる。残りの一割は、割り当てのない学校からの志望者の中より、在来の試験によってでもよいから選ぶことにする。そして割り当て数を入学後の成績によって増減する。

例えば、90 点以上の人を 1.5 人に 80 点以上の人を 1.4 人にというように計算して、

その新しい人数の割合で割り当てる。こうすれば推薦を正しくし、ほんとの教育を行い真の学力をつけないと割り当て数が減って行くので、情実[22]に捉われたり、受験準備教育に専念することを防止出来る。だいたい、これまでの実績のとおりになるから、不満を抱くこともない。

使命大きいキリスト教主義学校

日本の教育がこのように崩壊したのは、国公立学校が主だからである。教師が官公吏[23]であって官海遊泳術[24]を心得なければならないようでは、ほんとの教育が出来ないのは当然である。

それでも明治から大正にかけては、教育機構の方が官僚機構より上にあったからまだよかった。昭和の初め頃、東大総長は小野塚喜平次先生[25]であり、総理大臣は浜口雄幸氏[26]であった。二人は大学同期で、同期から東大総長と総理大臣を出したといって同窓会が開かれたと新聞に出た。

その会の様子でも、社会の考えでも、総理大臣より東大総長の方が上であるとされていた。ところが今は逆になって、総理大臣どころか、小僧っ子のような坂田文部大臣[27]が東大学長を押さえて偉いとほめられた。

役人は得意になったが、教育機構を官僚機構がまるめ込んで教育の崩壊をきたらしめた。お互いに足の引っ張り合いをして、他を押しのけて出世しようという官僚機構の悪が大学の中に入り込んだので、大学紛争が激しくなった。今は静まっているが禍根は深くなった。

公立学校が、このように進学率をよくして学校と教師の名声を上げることに専念するようになったので、教育が堕落したのである。このことを考えると私立学校の使命は大きい。官海遊泳術など考えなくともよい私立学校でこそ、教育の正常化が行える。

私立学校が公立学校の悪い真似などしないで、私立の大学と高校とで手を組み、受験教育をやめてほんとの教育をすれば、信頼されて優秀な者が私立へ集まるようになる。

特にキリスト教主義の学校の使命は大きい。学問と教育を守るべき使命を持っている。もちろん信仰のない偉い学者も教育者もあった。しかしこのように世の中が唯物的になって金儲け主義になってしまっては、その中にあって金儲けでない学問と教育を守ることは信仰がなければ出来ないと思う。「私は道であり、真理であり、生命である」と言われたキリストを信ずる者でなければ、真理の前にひざまずくように謙虚になれない。

また、人間の持っている全世界よりも尊いものを引き出す、という自覚がなければ、教育を金儲け主義から守れない。キリスト教の信仰は理論で証明出来ないと言っても、理論以下ではなく理論以上である。より高い理性によって信ずるのである。ほ

んとに真理を求めれば、人は最後にはキリスト教の信仰に至らざるを得ない。

信仰に反対する人は、結局ピリピ書 3 章 19 節にあるごとく、おのが腹を神としているのである。唯物論的学問に負けてはならない。

キリスト教主義の学校でも全職員が信仰を持つということはむずかしい。また信仰を強制してはならない。しかし真理を愛することを強く求め、学問を愛すること、教育を愛することにおいては全員一丸となって、教育の正常化、再建のために戦わなければならない。

キリスト教主義の学校で公立の真似をして東大合格率を誇るということは、もってのほかのことである。

（「信徒の友」1974 年 10 月号）

【 註・Ｖ章 】

(1)(1901 ～ 1945) 朝鮮の無教会の創始者であり指導者。18 歳で日本に留学し、内村の聖書集会に出席した。約 60 回にもわたるロマ書（ローマの信徒への手紙）講義のすべてに参加した金教臣からその感想と感謝を伝えられた内村は感激し、「将来余を最も能く解して呉れる者は或は朝鮮人の中より出るのである乎も知れない。」（内村鑑三全集 34 巻 p.104）と日記に記した。東京高等師範学校（現筑波大）を卒業した金教臣は帰国し、教師として働きつつ「聖書朝鮮」誌を創刊し、自ら企画・執筆・編集・発行などを行った。1942 年、聖書朝鮮誌に執筆した「弔蛙」という短い文章（寒さで死んでしまったと思ったカエルがまだ生きていたという内容）が朝鮮独立の主張と疑われ、金教臣のみならず読者 300 名以上（人数については詳細不明、400 名との記述もある）が逮捕された。この「聖書朝鮮事件」により聖書朝鮮誌は廃刊に追い込まれた。逮捕から約一年後に金教臣を含む最後の 13 人が不起訴処分となり釈放されたが、金教臣は朝鮮解放（すなわち日本の敗戦の日、1945 年 8 月 15 日）前の 1945 年 4 月 25 日、44 歳の若さで病死した。金教臣は入獄中も信念を貫き、創氏改名や日本語常用に応じなかったとされる。金教臣を師と仰ぐ李賛甲、朱鎏魯が後年、独立学園の姉妹校であるプルム学園を創立した。金教臣や朝鮮の無教会に関しては、鈴木弼美召天 30 周年記念誌「基督教独立学園のあゆみ」p.158 以降に詳しいので、ぜひ参照されたい。

(2)(1904 ～ 1986) 朝鮮の無教会の伝道者。1925 年に日本に留学し、東京農業大学の予科に在籍中、金教臣らと共に内村の聖書集会に出席。帰国後、ソウル市外の梧柳洞で農業を営みつつ金教臣と共に集会を開き、熱心に伝道を行い、聖書朝鮮事件では金教臣と共に約一年間投獄された。1931 年、宋斗用の自宅で金教臣と共に夏と冬の聖書研究会を開いたことを機に、毎週一度の梧柳洞聖書研究会（梧柳洞集会）が開かれるようになった。梧柳洞は地名で、梧柳洞一帯は宋斗用の家の土地だった。宋斗用が亡くなるまで指導した梧柳洞集会は、小さな図書館である梧柳文庫で現在も毎週日曜日に続けられており、宋斗用が発行した聖書雑誌である聖書信愛も、現在に至るまで刊行が続いている。1951 年には宋斗用の甥が梧柳洞に梧柳愛育園という孤児院を設立。宋斗用は園の運営に直接は参加しなかったが、運営委員会の顧問となり、愛育園はキリストの精神に従って運営されている。梧柳愛育園は、現在も児童福祉施設として続いている。梧柳洞集会は行事ごとに梧柳愛育園の講堂を利用するなど、互いに深い関係にある。宋斗用はまた、梧柳学園という小学校を 1933 年から 1945 年まで（以後は公立学校となった）運営し、1950 年代には長峰島にプルン学園という中学校を設立した。鈴木はこの中学校を 1973 年に訪問している。宋斗用は鈴木にとって大切な友人であり、1965 年に宋斗用が来日し、独立学園を訪問する際、待ちきれずに東京まで会いに行き、35 年振りの感動の再会を果たしている。宋斗用はその後、5 月 27 日に独立学園の第 17 回創立記念式で式辞を述べた。1981 年、鈴木は病床の宋斗用を見舞うために訪韓。1986 年の彼の死後にも再び訪韓し、墓碑の除幕式に出席した。

(3) 内村鑑三全集 32 巻 p.55 以降に収録。

(4) 紀元前 6 世紀、ユダヤ人が新バビロニア軍に捕らえられ、バビロンに強制移住させられたこと。第 1 次は前 597 年、第 2 次は前 586 年（前 587 年説もあり）。ペルシアのキュロス王により、前 538

年帰還が許可された。

(5) 日本の統治下にあった朝鮮各地で 1919 年 3 月 1 日に始まった全土的な抗日・独立運動である 3.1 独立運動の中で起こった事件。宗教指導者らにより事前に準備され、ソウル、平壌(ピョンヤン)などで同時に起き、約 3 カ月の間、全国で展開された。ソウルでは中心部タプコル公園(旧パゴダ公園)に集まった民衆の前で、独立宣言が読み上げられた。(ハングル読みではチュアムリ) 事件は、1919 年 4 月 15 日、日本軍の弾圧によって住民を礼拝堂に閉じこめ、火を放つなどして約 30 人を虐殺(ぎゃくさつ)するなどした事件。

(6) 知的認識能力・思考能力を高めるための教育。

(7) 道徳心を育て、人格・情操(じょうそう)を高めるための教育。

(8) 大学の方針などに不満を抱(いだ)く学生と大学当局との間で起こる争い。日本では、1960 年代後半に頻発(ひんぱつ)した。

(9) 独立学園とプルム学園は 1976 年 11 月 17 日に姉妹校となった。現在も文通をしたり、お互いの学校を訪問するプログラムなどを行っている。

(10) マルクスやエンゲルスに多大な影響を与えたドイツの唯物論(ゆいぶつ)哲学者、Ludwig Feuerbach (1804 ～ 1872) のことと思われる。

(11) 全日本学生自治会総連合の略称。各大学などの学生自治会の全国的連合機関。1948 年に結成され、1950 年～ 1960 年代の学生運動の中心となったが、1960 年前後から分裂し、学生運動は多様化した。

(12) Vladimir Il'ich Lenin (1870 ～ 1924)、本名は Vladimir Il'ich Ul'yanov、ロシアのマルクス主義者で革命家・政治家。学生時代から革命運動に参加、流刑(りゅうけい)・亡命(ぼうめい)生活を経て、1917 年、二月革命後帰国し、十月革命を成功させ、史上初の社会主義政権を樹立(じゅりつ)し、人民委員会議長としてソビエト連邦の建設を指導した。マルクス主義を理論的に発展させ、その後の国際的革命運動に大きな影響を与えた。

(13) 妻である Marie Curie (1867 ～ 1934) は、フランスの物理学者・化学者。夫である物理学者 Pierre Curie (1859 ～ 1906) の死後、ラジウムの分離に成功。1903 年、夫と共にノーベル物理学賞、1911 年にはノーベル化学賞を受賞した。

(14) ウランの主要な鉱石鉱物(こうせきこうぶつ)。

(15) (1878 ～ 1935) 物理学者・随筆(ずいひつ)家。地球物理学を専攻、東大教授。夏目漱石の門下。

(16) Johann Heinrich Pestalozzi (1746 ～ 1827)、スイスの教育家。近代西欧教育史に大きな足跡(そくせき)を残した。

(17) Friedrich Wilhelm August Fröbel (1782 ～ 1852)、ドイツの教育家。ペスタロッチの考えを継承。1840 年に、世界最初の幼稚園を創設した。

(18) 2001 年に文部省と統合されて文部科学省となった。

(19) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。

(20) 日本教職員組合の略称。全国の国公私立の幼稚園から大学までの教職員で組織する労働組合。1947 年結成。

(21) ストライキ。労働者が労働条件改善などの要求を貫徹(かんてつ)するために、一定期間団結して就業(しゅうぎょう)

を停止すること。

（22）私情がからんで、公正な処置のしにくい事柄。

（23）官吏と公吏。国家公務員および地方公務員。

（24）役人の世界の世渡り術のことと思われる。文中で講義が下手だったと評されている寺田寅彦は、官海遊泳術について、随筆（「手首」の問題）の中で以下のように記している。

> 官海遊泳術というものについてその道に詳しい人の話だというのを伝聞したことがある。それによると学校を卒業して役所へはいって属僚になってもあまり一生懸命にまじめに仕事をするとかえっていけない、そうかと言ってなまけても無論いけないのだそうである。どうもはなはだふに落ちない不都合な話だと思ったのであったが、しかし翻ってこれを善意に解釈してみると、やはり役人たちがめいめい思い思いの赤誠の自我を無理押しし合ったのでは役所という有機的な機関が円滑に運転しないから困るという意味であるらしい。（註・赤誠とはまごころのこと）

（25）（1870 ～ 1944）政治学者。東大教授、東大総長。

（26）（1870 ～ 1931）政治家。東大卒。

（27）大学紛争当時の文部大臣であった、坂田道太（1916 ～ 2004）のことと思われる。